結果の質

教員として学校づくりに携わり、現在、 学校づくりを「しないといけない」と考えると、「どうすれば」「誰もやってくれない」など困惑や不満が渦巻きます。 関係の質 が低い、 ④行動計画を立てる。 プローチ」かもしれない。①問題を特定 イメージされやすいのは 「問題解決のア 組織の成功 思考の質 学校づくりの進め方といえば、一般に 学校づくりに生かしていく 自分たちの強みや価値を ②原因を分析 循環モデル 、その原因は授業にある、 行動の質 ③解決策を検討し 「生徒の主体性 組織の成功循環モデルは、組織が成功に向かうサイクルを示 大学で教員の変容を研究している金井氏に、 したもの。「関係の質」を高めて、お互いを尊重し一緒に考える 解決 と、気づきが増えて「思考の質」が高まり、面白いので自発的に 動くようになって「行動の質」も高まり、「結果の質」も伴ってくる。 想像し、 のリソースを基に 開発のアプローチ」だ。対話をベースに いる金井達亮氏は、これに対して別の 出るべきですが 本来 ①自分たちの強みや価値を発見し、 進め方を提案する。「対話による組織 れた教育課題 持続を目指す な計画で導入しよう」といったように。 策としてアクティブ・ラーニングを、こん 「問題解決のアプローチをするなら 東京大学で教員の変容を研究して 題かはわからず、 その課題が本当に現場の切迫した 、問題意識は自分たちの内側から 、③実現方法を考案 』の解決を目指しがちで 学校では ②未来の可能性を 、乗れない先生も出

のが 話 そう思い立ったとき、・上辺だけの会 なで理想の学校を考えよう」。せつかく そしてそんな学校づくりの鍵を握る .で終わってしまわないように。 対話 、なのだという。

思考や行動が熱を帯びる 対話で関係の質が高まると

そ

、④実行と

明中・高校で、学校づくりといえるプロ ジェクトに10名の先生で取り組んだと 探り合いとなり きのことだ。 さに実体験したことだった。かえつ有 対話、と、上辺だけの会話 その違いは、金井氏が教員時代にま 。当初は、 、議論が深まらなかった 、先生同士の腹の

重

『外から示さ

っとお互い本音を出せるようになりた とだったのです」 「このままでは良いものを創れない。 (※)の理論などを踏まえ、 その対話とは、ざっくり説明するな そう思った僕らが始めたのが 対話するこ , N N C ŧ

問題とされることも常に移ろいます。

~ 今いるメンバー

,の強みや価

てきます。

しかも先の見えない時代

ら、話すこと・聴くことを通して、相手

ャンスがあれば全体研修でも

です

的であり

、先生たちも楽しいと思うの

きる理想の学校を目指すほうが、現実

値を見出

その時代の自分たちにで

質を高めるというもの。 受容された喜びも感じながら、 への理解を深め 、自分を省み、 お互いに 、関係

「よし、

、みん

ル」にも当てはまるものだ(図1) たという。こうした変化は、ダニエル・キ うになり、プロジェクトは一気に進展 士が自発的に楽しそうに話し合うよ を言える関係ができてくると、 2日の合宿を行った。 よって「お互いを理解する」ための1泊 を思い切っていったん脇に置き、 ム氏の提唱する「組織の成功循環モデ 金井氏らは、学校づくりという命 それを機に本音 先生同 、対話に

なく、 いう感じで始めていただければ」と思っ 学年団や分掌の先生で。もちろん、 ているそうだ。 紹介したい。金井氏としては、これらを 「やりたい人でちょっとやってみよう、 |ねるためのいくつかのアプローチをご 次のページからは、 、ワクワクしながら進めてほしいか 例えば自主勉強会から、または 学校づくりを嫌々では そうして対話 ع

東京大学大学院教育学研究科 学校教育高度化専攻 教職開発コース 金井達亮氏 かえつ有明中・高校(東京・私立)で、

大学大学院に進学。

別のアプローチを伺いました。

取材·文/松井大助

他の先生と共に高等部の「プロジェク

ト科」のコンセプトづくりから授業づくり まで携わる。2018年に退職し、東京

Approach 学校づくりの第一歩を対話から始める

対話で 心通わす 関係性を

先生同士で「素の自分を出していい」安心感と 「自分が受け入れられる」喜びを分かち合う

共通の 導入 【20分】

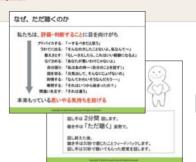
「ただ聴く」ことをやってみて、 自分を出しやすい「安心・安全の場 |を体感する

①趣旨説明【10分】

この場をありのままの自分を出せる安 心・安全の場にしたいこと、そのために 大事にしたいのが「ただ聴く」姿勢であり、
せず、理解しようとして」聴 それを体感するワークから入ることを説 明。また、主催者が今回の場を設けた意 図も語る。勇気を出して自己開示するほ ど他の先生も本音を出しやすくなる。

②ただ聴く【10分】

2人組で今の気持ちを語 り相手は「善悪など評価 く。聴いた側は話し手の印 象など感じたことを返す。 人にどう見られていたかわ かると話し手は安心する。



人生曲線を作成し、

個々の充実度の揺れ動きを共有

その人の芯にある価値観を探る

ワークシートを使い、教員人生の充実度の揺らぎを曲線で表し、ポイン

トごとに出来事や感情も記す(右はその一例)。充実度に代えてモチ

ベーションや幸福度の曲線にしてもOK。やりやすい軸で。

手立て

[35分]

引き続き対話に じっくり時間を かけたいなら



個別での思考を はさんでから 対話したいなら



全員が気負わず 考えられるよう 支援したいなら



手立て

【55分】

ペアインタビューで

成功体験や理想に耳を傾け 個々の強みや価値を見出す

2人組で、ワークシートに沿って質問し、相手に「成功体験」と「理想 の職場や人」を語ってもらう。聴き手は、その話に対して助言や否定 や自分語りなどせず、ただ聴き、要点をメモする。





②グループで対話【15分】

4人組となり、順番に、イン タビューした相手のもつ強 みや価値を メモを其に話 す。聴いた側は「そんな強 みや価値をもつ自分たちは どんな学校を創れるかしを 想像し、感じたことを返す。

ベアインタビューの共有

インタビューをした相手のことを紹介します。その人の 強みと価値にフォーカスして紹介してください。

1人2分です。

聴いた人は感じたことをフィードバックします。 フィードバックは1人30秒です。

②グループで対話【15分】

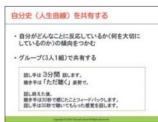
11 個人ワーク【15分】

自分史(人生曲線)をかく

・横軸に時間軸 (先生になってから今まで)

- 総軸に充実度(感情の浮きすみ、赤狐度) なめらかな曲線でつなぐ

3人組で順番に、今までの 教員人生を、どんなときに 充実度が高かったかを意 識して話す。聴いた側は 「話し手はどんな価値観を 大切にしていると感じた か」など共感や気づきを得 たことを返す。



③ギャラリーウォーク【5分】

対話で見えてきた「自分が大切にしていること」を人生曲線のシートに 加筆。その用紙を壁に貼るか机に並べて、みんなで見て回り、各先生 の歩みと、その人の芯となっている考え方や価値観を知る。

③ギャラリーウォーク【10分】

対話で見えてきた自分の強みや価値を、各自がA4用紙に記入。思い 浮かばない人は先ほどの4人組から教わる。その用紙を壁に貼るか机 に並べ、みんなで見て回り、お互いの強みや価値を理解し合う。



価値観ワークシートで自分にとって大事なものを見出し お互いの価値観の共通点や差異を確かめ合う

①個人ワーク【15分】

ワークシートの言葉を2~3分眺めてから、自分が大事 だと感じるものを20個→10個→5個→3個と絞り込む。 選んだ3個をA4用紙に書いてながめる。

価値観ワーク

- ワークシートの価値観ワードをながめます。
- 自分が大事と感じるワードを選びます。 *ファシリテーターのガイドに従ってください。

②グループで対話【15分】

3人組で順番に、自分の選んだ3個を眺めて感じたこと を話す。話しづらい人は20個から3個に絞り込んだ経 緯を話す。聴いた側は共感や気づきを返す。

価値観ワーク

- 選んだワードを書き出します。
- ・そのワードをながめて、感じたことをグループ(3人1組) で共有してください。

話し手は 2分間 話します。 聴き手は「ただ聴く」姿勢で。

話し終えた後、 聴き手は30秒で感じたことフィードバックします。 話し手は30秒で聴いてもらった感覚を話します。



③ギャラリーウォーク【5分】

選んだ3つのワードを書いたおのおのの用紙を、壁に貼 るか、机に並べて、みんなで見て回り、どの先生がどんな 価値観を大事にしているか確かめ合う。

価値観ワークシート

責任	協力	平等	成長
冒険	管理	卓越	幸せ
利他主義	正確	刺激	正直
熱意	勇気	公正	希望
真偽	創造	信念	謙虚
相互信頼	好奇心	家族	独立
冷静	決意	集中	他者への影響
率直	とこだ学	自由	品位
他者を気にかける	多様性	友達	喜び
挑戦	倹約	楽しみ	正義
思いやり	効率	寛大	愛
一貫性	共感	柔軟	忠実
誠実	スピード	自発的	安定
熟練	感謝	精神力	実用
開放	知識豊富	組織	権力
指令	他者への尊敬	地位	プロ意識
独創	安全	成功	用意周到
平和	無心	サポート	質
完璧	サービス	チームワーク	戦略的
ポジティブ	シンプル	心遣い	健康
理解	信頼	真実	期限を守る
I			

す とは、 ジしておきたい。 話が生まれるようにしていきたいの た、 ことが目的 しいです。 たいです」と金井氏は言う。 えるなど、 かけに、 型どおりの進 冒 対話が深まっていたら時 強みや価値を発見できた、 1頭に対話を入れる、空きコマに気 方が感じてくれること。 対話を通 れば継続的な対話の場もイメー 普 ワークショップをうまく 、先生方の表情に注目してほ では 段の して、 行より、 月1の勉強会 ありません。 職員 関係の質が高まつ 全でも自 、例えば 問延 大事 そこをき 、などと 先生 然に対 長も

なこ 回

老 方 対話が深まることを重視 うまく進行することより

ときは

「目的を履

き違

えないようにし

《際に対話のワークショップをやる

共通の 締め 【5分】

今の気持ちを話し 多様な感じ方を お互いに受容する

●グループで対話【5分】

対話した4人(3人)でまた集まり、取組 を終えた今の気持ちを、話したくなった 順に話す。主催者は何らかの形で各 先生の強みや価値を全体に共有する (後日レポートを配るなど)

の合う同僚と、などなどだ。

対話で 心躍る 学校づくり

先生同士で「新しいものを生み出せる」楽しさと 「この仲間ならできる」という自信を手にする

手立て

Q [60分×3] 理想の学校を思い描き、 実現方法を考えて行動に移し 学校づくりの手ごたえをつかむ

前ページまでの対話で共有した強みや価値を踏まえ、以下の3つの テーマで対話を継続。関係の質が高まるなかでの思考→行動→結 果が"好循環"を生むことを体感し、ワクワク感や自信を得る。

- ①私たちがつくる理想の学校 [60分] 各自の強みや価値が生きる理想の学校を想像した後、粘土で表現。
- ②理想の学校の実現方法を考える[60分] 理想の学校に向かう具体的な行動を考える。小さなことでもいい。
- ③実行してみたことの振り返り[60分] 行動してみた後で集まり、対話で振り返り。次の行動も考える。

は先生方 有 方 を 僕は思っています という感覚を味わってほしいのです やってみて、 基に、 ·校づくりが本格化する は法を考えて行動に移せば ・校にしたいか」を思い描き、 志でできる範囲から始めるのでもい と金井氏は考えている。 変えられる ・校づくり さらに対話を重 一人ひとりがもっているのだと 自 といっても大仰に捉 分たちで創 その 変革 本ねて のリソー 造 その実 でき Ļ١ どんな よい た

その経験が明日の糧になる自分たちで創造できた

前ページまでに見出した強

分や価

手立て

月 [50分]

生徒に育みたい資質・能力を

4つの観点から導き出して対話 授業・学校づくりのきっかけにする

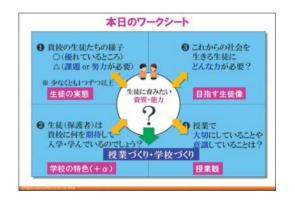
この取組のみ、弊誌編集長が、全国の先生方から研修講師を拝命した際に行っている実践のアレンジ。生徒の実態、自校への期待、未来で必要な力、授業観の4つの視点から学校の姿を描く。

①個人ワーク+グループで対話【10分×4】

ワークシートの項目 ●を、個人で考えてキーワードを書き【2分】、続いて数人で、書いたことを1人ずつ発表、聴いた側は共感したことや気づいたことを返す【8分】。項目 ② ③ ④ も同様に進める。

②グループで対話+全体でシェア【10分】

数人で、4つの観点を基に生徒に育みたい資質・能力を考え、全体 共有。各先生の思いを知り、授業づくり・学校づくりのきっかけに。



(※)通常の研修では、場をほぐすアイスブレイク、対話をしやすくする関連トビックの紹介も入れ約2時間で実施。今回は「思ったことを言える」雰囲気が既にあるという前提でこれら要素を割愛。

スタートは緩やかでも、放物線のように熱量が高まり 想定を超えた先生たちの活躍に驚くことになった

かえつ有明中・高校の佐野先生は、かつて金井氏と共に学校づくりのプロジェクトを進めたメンバーであり、 今も対話による組織開発を推進している。同氏にその後の学校の変化を伺った。 かえつ有明中・高校 (東京・私立) 副教頭 佐野和之先生



本校に新しいクラスを創設することになり、 10人のメンバーで対話をくり返し、コンセプトからまとめた。そんなプロジェクトを金井先生と一緒に進めたのは、6年前のことです。

以降は、他のさまざまな先生とも対話を重ねてきました。全体研修で対話のワークをしたこともありますし、続けてきた自主勉強会の参加者も、1人、2人、5人、10人と増えてきました。昨年後半からは、月1回の職員会議でも冒頭20分は近くの先生同士で対話をしています。各分掌の部長の先生たちが「そのほうがいいの

では」と言ってくれたのです。

対話が広がってきたのは、そこに自分を受けとめてもらえる心地良さがあるからだと思います。そのうえ、そうした自分を出せる場では力も発揮しやすいんですよ。例えば昨年の中学1年担当の先生たちは、他学年所属の授業担当者が修学旅行や宿泊行事で手薄になる期間に、自習ではもったいないと、それぞれが学外で学んできた哲学対話やインプロ、プロジェクトアドベンチャーやマインドフルネスなどを用いて「生徒と共に実践する3日間」を発案し、実現させま

した。自分を受けとめてもらえる心地良さを知った先生たちは、生徒にもそうした場をつくろうとしたのです。そんな先生たちのエネルギーによって、生徒もどんどん自分を出せるようになって。一番嬉しいのは、そうやって僕の想定を越えたことが自然発生的に起き始めたときですね。対話によって関係性を構築するまでは時間がかかるので、最初の変化は緩やかだと思います。ですが、そうした対話を大事にして続けていくと、気づけば放物線を描くように、みんなのエネルギーが高まっていくんですよ。